

勢力予報 5日先ま

1945年9月 枕崎台風	九州に上陸し各地通過、死亡・行方不明約3700人
47年9月 カスリーン台風	関東と東北で大雨。川の堤防決壊や土石流が発生、死亡・行方不明約1900人
54年9月 15号 (洞爺丸台風)	全国各地で被害が出て、青函連絡船「洞爺丸」が沈没。死亡・行方不明約1700人
58年9月 22号 (狩野川台風)	東海と関東で大雨、伊豆半島で狩野川が氾濫。死亡・行方不明約1200人
59年9月 15号 (伊勢湾台風)	和歌山県に上陸、本州縦断。高潮や強風、川の氾濫で、死亡・行方不明約5000人
90年9月 19号	和歌山県に上陸、本州縦断。死亡・行方不明約40人
91年9月 19号	非常に強い勢力で長崎県に上陸し北上。暴風での死亡や建物損壊が多数発生
93年9月 13号	九州中心に各地で暴風、大雨による住宅損壊や浸水
2004年10月 23号	台風と前線の影響で広範囲で大雨や土石流災害。死亡・行方不明は98人
11年9月 12号	紀伊半島中心に記録的大雨。和歌山、奈良各県などで死亡83人、行方不明15人。山の深層崩壊が多発。気象庁が特別警報を新設する契機に
13年10月 26号	東京・伊豆大島で猛烈な雨が続き、土石流が発生。死亡・行方不明43人
16年8月 10号	気象庁の統計開始以来初めて東北太平洋側に直接上陸。岩手県と北海道で死亡・行方不明が関連死を含め29人

過去の主な台風

(年月は上陸、または最接近時)

004年が10個だった。

それぞれ名前があり、に改良される。

本へ?

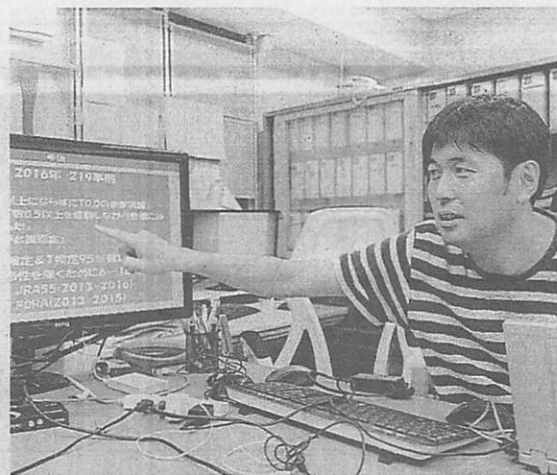
増えるかなと正確なことは言えない」と話す。

台風が発生し、発達する海上には観測点がない。日本も含む各国は雲の動きを把握した衛星画像を解析して「推測」。強い台風は誤差が大きい傾向があり、坪木教授は「現在の態勢では今後の変化を考えるとできない」と話す。

北西太平洋では米軍が、1987年まで航空機による台風観測を行っていた。坪木教授は「今秋以降にも再び航空機で観測を行い、データを世界の気象機関に提供する準備をしているといい、「将来は無人機で台風をずっと追跡するのが理想。観測を重ねることで、災害の防止につながる」と話した。

日本新聞 2018 9.3

研究成果を説明する横浜国立大の筆保弘徳准教授
＝8月、横浜市



ンも見えてきた。今年8月、日本の南で発生した台風15号は東西風のぶつかる所で生じたタイプで、特徴通りに北上、宮崎県に上陸した。台風の発生時にどのタイプかが把握できるようにになれば、最終的な予報を決める際に参考になる。発生前であれば、台風が生まれるかどうかの予測につながる。筆保准教授は「将来は天気予報で『このタイプの台風はこういう特徴があるので注意を』と言えるかもしれない」と話した。

発生時に決まる特徴

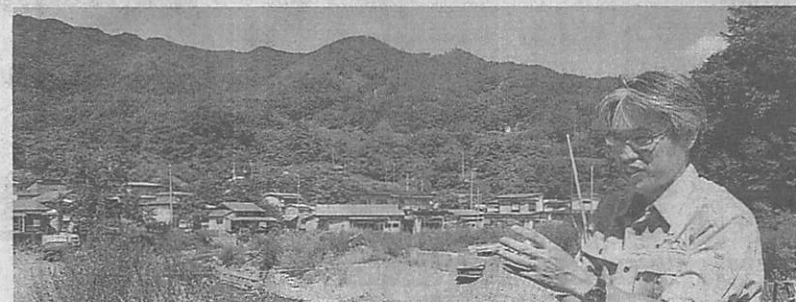
「生まれながらにして平等ではない」。どれも同じように見える台風も、実は熱帯で発生する際の大気のパターンで、経路や発達しやすいさなどに特徴があることが分かってきた。横浜国立大の筆保弘徳准教授(気象学)は予報のほか、将来的には発生予測にも生かせないか考えている。

台風は海面水温の高い領域で生まれるが、筆保准教授は「ただ水温が高いだけではだめで、渦を巻くトリガー(引き金)が必要」と指摘。大規模な風の合流や波打つような動きなど、トリガーとなる大気のパターンは五つあるという。

1979～2013年に生まれた825個の台風が、どのパターンに当てはまるのか、風向や風速などのデータから算出した指数を用いて分類し、特徴を調べた。

結果は「東風と西風がぶつかる所で発生する台風は北上しやすく、日本に上陸する割合が多い」「既に発生している台風の後にできる台風は猛烈な勢力に発達しやすい」といった傾向が浮上。台風の卵となる雲の渦が発達したケースと、そうならなかったケースも分析し、発生しやすいパター

経路や発達度合い、予測活用へ



「輪中堤を作る計画です」。岩泉町役場から東へ12キロの中島地区。河川改修を話し合う地元協議会に加わる小笠原准教授が、山の麓に開けた川沿いの集落を指さした。周囲を囲むように堤防を築き、国道もかさ上げして浸水を防ぐ計画だが、堤外の農地との行き来など生活への影響

がある」と指摘した。小本川沿いの国道455号を車で走ると、砂利や土砂を運ぶダンブが行き交い、川底を掘削する重機も目につく。小笠原准教授は河原に生える木に目を向け、「河道に木が定着すると障害になり、川が流れる水の量が減って危険性が高まること